

化粧行動・化粧意識から見た「人の目が気になる」意識についての一研究

－「人の目」を意識する場面で、どのような感情を抱き、どのような行動をとるのか－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
山下 真衣

〔問題と目的〕「人の目が気になる」意識は、「自分を見ている他者」を想定するために生じる。この点において、「人の目が気になる」意識は、自己意識・他者意識と深く関わる社会的な意識である。それゆえに、「人の目が気になる」場面における意識と行動は、対人関係のあり方にも大きな影響を与えている(辻, 1993)。

公的自己意識と「見られる自己」に対する関心は思春期から青年期にかけて高まる(神谷, 1997・鈴木, 1997)。そして、思春期以降に発症し、青年期にかけて多く発症する精神障害(Ex. 対人恐怖, 視線恐怖, 赤面恐怖)には、公的自己意識の高まりと関係がある(辻, 1993)。そこで、青年期における、「人の目が気になる」意識に関わる問題は、アイデンティティの模索と対人関係の問題とも関連し、複雑化する。

人間が人間らしくあるために、自己意識は必要であり、皆が「人の目が気になる」意識を抱いている。特に、近年は、プリクラやデジカメの普及・情報の氾濫・化粧品の低価格化、等によって、容姿に関する「人の目が気になる」意識が高まっている(米澤, 2008)。

化粧は、心理学的にも重要な意味を持つものであり、多くの先行研究が存在する。しかし、女性の持つ化粧に対するデリケートなこだわりは十分には捉えきれていない。

青年期の女性達を対象とし、化粧行動と化粧意識に表れる「人の目が気になる」意識を調査することによって、青年期心性と、「人の目が気になる」場面における不適応を抱える者の理解,を目的とした。

〔方法〕女子大学生と女子大学院生とを対象に、半構造化面接と質問紙調査を行った。面接協力者のうち、普段使用する化粧品目数が7以上の者の面接内容を、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に分析した。

〔結果と考察〕質問紙調査の結果は、使用化粧品目数に関わらず、青年期女子の「人の目が気になる」意識が高いこと、化粧行動・化粧意識を規定する要因が多いこと等が示された。また、化粧をする事による安心感と自信の増加が、モニタリングの必要性を軽減している可能性も示された。面接の内容からは、よく化粧をしている女性達が、化粧をした顔を良いもの・人に見せられる顔・と考え、素顔の顔を良くないもの・他人には見せられない顔・と考えている,といった特徴が見られた。